

「学問と社会のあり方」研究会 背景と趣旨

桃木 暁子（総合地球環境学研究所研究推進センター 助教授）

1時半を過ぎましたので、始めたいと思います。どうもこんにちは。今日は所内外からたくさんのかたにおいでいただいて、どうもありがとうございます。今日は「学問と社会のあり方」研究会第1回ということで、私からは、この研究会を開催するに至った背景や趣旨を簡単にご説明したいと思います。

（以下スライド併用）

背景としてはいくつかのことがあります。まず一つに、地球研の設立の趣旨ということがあります。地球研は2001年に設立された新しい研究所ですが、その設立の趣旨として、いわゆる地球環境問題の総合的な研究を行うということと同時に、その成果の意味するところを広く社会に伝え、さらに、それらによって地球環境問題の解決に資する学問的「知」を構築していくということが掲げられています。

このことから、「研究成果発信活動」というのが地球研の活動の一つの柱として、設立されたときから位置づけられています。地球研では、日本の国立大学・研究機関の法人化よりも以前にこういう趣旨で活動が始まりました。

その後、皆さんご存じのとおり、日本では国立大学・研究機関が法人化されまして、国立大学法人法という法律ができました。それには大学・研究機関の業務の一つとして「研究成果を普及し」ということが規定されています。

さらに、日本の状況としては、日本の科学技術政策として科学技術基本計画というものが5年に一度出されます。2006年度から始まった第3期は2006年～2010年を対象になりますが、その基本姿勢の一つとして、「社会・国民に支持され、成果を還元する科学技術」ということが掲げられています。「社会・国民に支持される科学技術」という章があり、「科学技術に関する説明責任と情報発信の強化」ということが書かれています。

日本の科学技術政策の方針としてこういうことが掲げられているので、私たち国立研究機関や研究者は、ここに書かれているように、研究活動や成果を社会・国民にできる限り分かりやすく伝えるということをどうするかを考えざるをえなくなりました。

これはちょっと参考までで細かい説明はしませんが、国立大学法人法ができて以後、このようにたくさん国立大学、一部私立大学もありますが、そういうところがそのためのいろいろ講座を作ったり、活動を行うようになったという例です。そういうところにお金が出ているということです。

3番めとして、このような問題は日本だけのことかといえば、世界、特に先進国では同じようなことがいわれています。この状況については、昨年3月に地球研の研究推進センターの報告会でちょっとお話ししたので、それをお聞きになったかたは多分覚えていらっしゃると思います。

例えばヨーロッパでは1980年代半ばくらいから「科学と社会のあり方」ということが強く問題にされるようになりまして、その後、いろいろなそれに対応する取り組みがなされるようになりました。

その背景には、いわゆる「科学離れ」と「説明責任」ということがいわれています。なぜそういう状況になるかということ、一つには科学研究が細分化され、精密化し、だんだん分かりにくくなってきている、研究の当事者以外にはますます分かりにくくなってきているということと、もう一つは、いわゆる環境問題や原発事故、BSE問題、生殖医療、遺伝子組み換え等、そういうことによる問題が起きてきて、人々は何となく科学不信感のようなものを持ってきているということが挙げられそうです。

ヨーロッパでは、フランスやイギリスが早くからこういう問題に対する取り組みを行ってきていますが、今言ったような状況というのは日本でもかなり共通しているのではないかと思います。

それでは、私たち研究者や研究機関としては何をしていけばよいのかということが問題になります。これは地球研でもこれまであまりきちんと議論されてこなかったように思います。研究成果発信活動というのは、地球研では設立のときからいわれているわけですが、それをどうしていこうかということがあまりよく分からない状況で今まで来ているような気がします。現状を見てみると、次のような疑問を感じるわけです。

例えば研究成果の発信活動というのは、いわゆる広報なのか。これは日本の大学でいう意味の広報で、英語でいう Public Relations はかなり広い意味を持っていると思いますが、日本の大学で広報というと非常に意味が狭いので、そういうことを言っているのだろうか。

あるいは研究者や研究機関の業績を宣伝することなのか。それから技術的な問題なのか。中身がなくてもやり方をうまくすればうまく見えるのだというような意見も聞いたことがあります。そういう問題なのだろうか。社会に発信するというのは、何かイベントをやればよいのだろうか。そのときに有名人を呼んでくればよいのだろうかとか、こういう疑問が出てきます。

ですが、私は、これらはどれもちょっとちがうのではないかと思うわけです。こういうことをやっても研究成果の意味は伝わらないだろうと思います。では、何をするのか。

もう一つ、私が今まで見聞きする議論の中で気になるのは、いわゆる広報というようなこと、ジャーナリズム、科学コミュニケーション、これらは別々の目的の、別々のジャンルの活動だと思いますが、これらのことが一緒に研究成果発信活動として議論されているという印象を受けます。それをもうちょっとちゃんと区別して話したほうがよいのではないかと思います。ジャーナリズムというのは研究者の代弁者ではないのです。そういうところも議論できればいいと思います。

こういったことを筋道立てて考えるために、「学問と社会のあり方」研究会を開催することにしました。ここに「関西初」と書いてあります。特に先ほど言った国立大学法人法ができてから、東京近辺ではこのようなテーマの会合がけっこう開かれていて、私もそのような会合にずいぶん参加して、そこで情報を得ていましたが、関西では今まであまり行われていないので、地球研は関西にありますから、地球研で関西中心にこのような研究会を開くのは意味があるのではないかと思います。

趣旨は、「研究成果発信活動」、「研究成果を広く社会に伝える」とはそもそもどういうことなのか、そのために研究者、研究機関は何をしていけばよいのか、何ができるのか、それによって何がかわるのか、といったことを「学問と社会のあり方」という切り口で広く議論し、研究者および研究機関が今後、社会とのかかわりの中でどのように活動していけばよいのかの方向を探っていくということです。

最初に述べましたが、地球研の設立の趣旨には、それによって学問的「知」を構築するということが書かれていますので、その辺まで議論したいと思っています。

ここでちょっとお断りというか、なぜ「学問と社会」というのか、説明しておきます。一般的にはこの問題は「科学と社会」の問題といわれています。英語でいえば Science and Society です。しかし、日本語では科学の意味がとても狭く、理工系だけが対象というイメージがしますので、それもあって地球研では科学という言葉を使わないで、学問と言っています。地球研は文系・理系両方を併せた分野横断的な研究をしているので、科学より学問という言葉のほうがいいだろうということです。そのこともあり、この研究会でも学問という言葉を使いたいと思います。

実際に文系の人に話を聞きますと、今、理系に関しては「科学と社会」ということがけっこう話題になりますが、文系に関してはそういう議論もなく、社会と全然接点がないという状況で、そういう意味では文系のほうが本当は問題が深刻なのかなということもちょっとあります。

今日は第1回ということで、まず、この問題をめぐる日本と世界の現状というか、日本および世界でどんな取り組みがなされているかというようなことを主に紹介します。

プログラムはこのとおりで、私の後に四人のかたにお話をいただいて、最後に総合討論をして、終わってから懇親会という予定です。

こちらに移って司会をさせていただきます。1番めは藤田さんをお願いします。多分今日ここに来ていらっしゃるかたは、今日のスピーカーについてあまりご存じないと思うので、簡単にご紹介したいと思います。

藤田さんは現在、科学技術振興機構の科学技術理解増進部というところに所属して、アウトリーチ活動の支援を担当していらっしゃいます。もともとは宇宙物理学がご専門で、イギリスの研究機関でお仕事をなさったり、その後、筑波などで研究なさっていました。JSTにいらっしゃったのは1年くらい前です。その傍ら、「ネイチャー」の翻訳者という活動や、科学ジャーナリストとしての活動もなさっています。

今日は、最初にお配りしたプログラムとはタイトルが変わっていますが、「アウトリーチのすゝめ」ということでお話いただきます。JSTの理解増進部というところでアウトリーチ活動の支援をしているので、今日はそれについて話していただくのかなと思いましたが、いろいろJSTの事情もあるようなので、今日は藤田さんのお考えと、一部JSTで支援活動としてこれまでどんなことをしてきたかということを紹介していただきます。では、35分くらい発表していただいて、その後5分くらい質問ということで、お願いします。

「学問と社会のあり方」研究会 — 背景と趣旨 —

2007年2月1日 第1回研究会

総合地球環境学研究所
桃木暁子

背景(1)

地球研の設立の趣旨：

- いわゆる地球環境問題の総合的研究を行なう。
- **その成果の意味するところを広く社会に伝える。**
- それらによって地球環境問題の解決に資する学問的「知」を構築していく。



「研究成果発信活動」が一つの柱

背景(2)

国立大学法人法

業務の一つとして「**研究成果を普及し**(.)、及びその活用を促進すること。」

第3期科学技術基本計画(2006~2010年)

基本姿勢の(1)「社会・国民に支持され、成果を還元する科学技術」

第4章 社会・国民に支持される科学技術

2. 科学技術に関する説明責任と情報発信の強化

科学技術への国民の支持を獲得することの基本は、科学技術の成果を国民へ還元することと、それを分かりやすく説明していくことである。

また、研究機関・研究者等は研究活動を社会・国民に出来る限り開示し、研究内容や成果を社会に対してわかりやすく説明することをその基本的責務と位置付ける。その際、多様な媒体を効果的・効率的に活用する。

研究者等と国民が互いに対話しながら、国民のニーズを研究者等が共有するための双方向コミュニケーション活動であるアウトリーチ活動を推進する。

2005年度時点の国立機関等での活動

大学の制度、プロジェクト	サイエンスカフェ
北海道大学 科学技術コミュニケーション養成ユニット	サイエンスカフェ札幌(北海道大学)
お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター	東北大学サイエンスカフェ(東北大学)
東京大学 科学技術インタープリター養成プログラム	サイエンスカフェ(東京大学)
大阪大学コミュニケーションデザイン・センター	サイエンスカフェ神戸(神戸大学)
神戸大学大学院総合人間科学研究科ヒューマン・コミュニティ創成研究センタープロジェクト	Miraikanサイエンスカフェ(日本科学未来館)
和歌山大学学生自主創造科学センター	その他、民間団体主催のもの
京都大学人文科学研究所文化研究創成部門 加藤和人研究室	(Café Philo(1995 -)大阪大学から)
東京工業大学 科学技術コミュニケーション論	
早稲田大学科学技術ジャーナリスト養成プログラム	

背景(3)

世界の状況

- ・ 現在、先進国共通の問題
- ・ 1980年代半ばから、ヨーロッパで強い問題意識(「科学と社会」のあり方)
- ・ 1990年代初めから、ヨーロッパでさまざまな取り組み

その背景には、「**科学離れ**」と「**説明責任**」

←科学研究の細分化、精密化

←環境問題、原発事故、BSE問題、生殖医療、遺伝子組み換え作物

この状況に対応して、フランスとイギリスが先駆的活動

それで、実際、何をすればよいのか？

地球研ではこれまで、きちんと議論されたことがない

現状からの疑問：

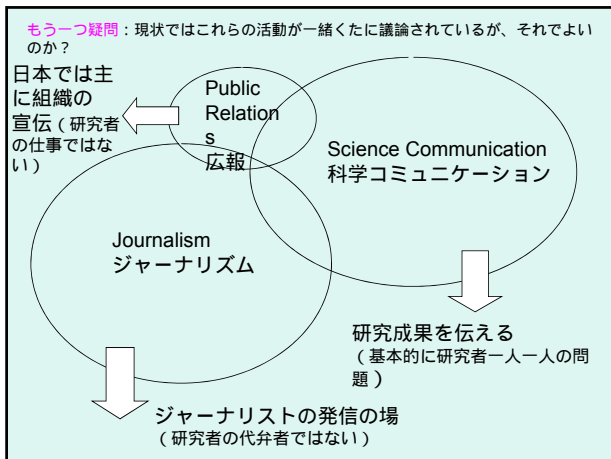
- ・ それはいわゆる「**広報**」(日本の大学の意味での)なのか？
- ・ 業績の「**宣伝**」なのか？
- ・ それは**技術**の問題か？(中味がなくてもやり方でうまく見える?)
- ・ **派手なイベント**をやればよいのか？
- ・ **有名人**をよんでくればよいのか？

どれもちょっとちがうのでは？

(これらで研究成果の意味は伝わらない)



では、何を？



これらのことを筋道立てて考えるために、

「学問と社会のあり方」研究会

関西初！完全公開

趣旨：

「研究成果発信活動」あるいは「研究成果を広く社会に伝える」とはそもそもどういうことなのか、そのために研究者/研究機関は何をしていけばよいのか、何ができるのか、それによって何がかわるのか、といったことを「学問と社会のあり方」という切り口で広く議論し、研究者および研究機関が今後、社会とのかかわりの中でどのように活動していけばよいかの方向をさぐる。

学問的「知」の構築というところまで議論したい。

なぜ、「学問と社会」か？

- 一般的には「科学と社会」(Science and Society)といわれるが、
- 日本語の「科学」は意味がせまく(理工系のみイメージ)、
- 地球研でも「科学」の語を使わず、広くさまざまな領域を含めるために「学問」としている、

↓

この研究会では、地球研的な分野横断的な議論をするために、「学問」を使う。

(実際、文系のほうがさらに問題が深刻かもしれない)

本日のプログラム—日本と世界の現状

13:30-13:45 桃木暁子(総合地球環境学研究所研究推進センター助教授)
「学問と社会のあり方」研究会—背景と趣旨」

13:45-14:25 藤田真高(科学技術振興機構科学技術理解推進部 主査)
「アウトリーチのすすめ」

14:25-15:05 渡辺政隆(文部科学省科学技術政策研究所 上席研究官)
「科学コミュニケーションという考え方—歴史、現状、将来」

10分休憩

15:15-15:55 中村征樹(文部科学省科学技術政策研究所 研究官)
「サイエンス・カフェの挑戦」

15:55-16:35 小林傳司(大阪大学コミュニケーションデザイン・センター 教授)
「研究者と科学コミュニケーション：大阪大学コミュニケーションデザイン・センターの試みから」

16:35-17:30 総合討論
終了後 懇親会